

キーワード 釜ヶ崎、子ども・高齢者、表現

◎私たちが行ったこと

私たちの団体の代表は詩人で、詩の朗読パフォーマンスや大阪市が発行するフリーペーパーに、2年間にわたって連載（詩についてのエッセイ、詩の朗読CDの作成報告等）を行っていました。2003年、大阪市が経営不振に陥った浪速区の複合娯楽施設（フェスティバルゲート）の空き店舗の一部を借り上げ、現代芸術の拠点形成事業を立ち上げました。指定管理者制度によるものではなく、家賃と光熱水費を行政が負担し、NPOが運営する公設置民営という全国初のモデルでした。4つの団体はその事業に参加しました。私たちは最初は任意団体として入居しましたが、2004年10月に法人化しました。活動をすすめるために、舞台スペースをさまざまな表現活動の機会となるよう安価で提供したり、カフェを運営するなどし

特定非営利活動法人

こえとことばとこころの部屋

ミッション

人間の生に根源的にかかわるものである「こえとことば」の表現を通して、地域の人々と共有する機会をつくり、自分自身や他者を発見し、また互いにエンパワメントするきっかけづくりを行います。ゆたかな市民社会の実現にむけて、アートの力を活用します。

設立年月 2004年10月
メンバー数 16名
代表者名 上田 假奈代

大阪府大阪市西成区
山王 1-15-11 ココルーム
TEL&FAX 06-6636-1612
cocoroom@kanayo-net.com
<http://www.kanayo-net.com>

連絡先 上田 假奈代



活動地域
大阪府大阪市西成区釜ヶ崎地区



下：ワークショップの様子

私たちが大切にしていること
創造をあきらめないこと。よく話し合
うこと。他分野の団体や個人と連携し、
つながりを大切にすること。

て、運営をはじめました。カフェには多様な人が集うようになり、若者が仕事や人間関係に悩んでいることを耳にしたことから、仕事について話をするトークサロンの企画をはじめました。ボランティアの受け入れが、人間関係に悩む人や発達障害をもつ人たちにとって社会との接続点となることに気づき、単に職業訓練をして就職するための就労支援ではなく、表現を通してゆるやかに他者や社会と関わっていく生き方をさぐる「就労支援カフェ」事業も始めました。当初はアート NPO として若手アーティストの発表の機会をつくるなどしていましたが、「アートと公共性／公益性」について考えることが増えてきました。行政と協働をはじめたときから考えていたのですが、一歩外に出ると見かけるホームレスの存在に目を閉じていることはできなくなり、アートが社会と関わるとはどういうことかを考えるようになりました。建物は釜ヶ崎と隣接しているところにありながら、釜ヶ崎の情報を耳にすることはなく、地域が分断されていることを痛感しました。私たちは、それまでホームレス問題には何一つ関心がありませんでした。カフェに出入りする日雇い労働者や支援者から、少しずつ釜ヶ崎の歴史や現状などを学びました。そして、ホームレスを経た生活保護受給者の紙芝居劇団のマネジメントや、「ビッグイシュー日本版」創刊の応援、ホームレスの表現活動の支援など、社会的排除を受けている人たちの表現活動を下支えするような活動に重点を置くようになっていきました。その後、活動に使用していた市の娯楽施設と土地が民間に売却されることになり、2008年1月、新たなカフェを釜ヶ崎地域内の商店街の空き店舗にオープンさせました（現在も運営を継続中）。日頃から町会長や簡易宿泊所組合の職員等とネットワークを築き、活動の意義をお話ししてきたこともあり、オーナーが快く元スナックの店舗を安価で貸してくれました。オーナーとは現在も良好な関係を維持しています。

下：路上生活者の安否を気遣う修道女

こどもの里
当初、釜ヶ崎のこどもたちに健全で自由な遊び場を提供したいとの思いから学童保育所として開所された施設。1996年に大阪市から「こどもの家事業」として認可され、2001年には大阪市家庭養護寮として指定を受け、現在はこどもたちの遊び場としてだけでなく、生活の場としても機能している。

団体と「こどもの里」とのかかわり
アートNPOとしてアートと社会の間わりを探る中で、釜ヶ崎にはアート活動がほとんど存在しないこと、こどもたちが地域の中で配慮されていないことに気付いた。そこで、地域の養護児童施設「こどもの里」に表現のワークショップの出前をもちかけ、2007年から実施している。当初「こどもの里」側も半信半疑だったが、ワークショップの回数を重ねるうちに、騒がしかったこどもたちが団体の訪問を楽しみに待ってくれるようになり、自分の気持ちを表現することばを持つようになったことなどから、信頼関係を構築するに至った。



釜ヶ崎のこどもたちと表現のプロジェクト

日雇い労働者のまち・釜ヶ崎地区にある養護児童施設「こどもの里」に、アーティストがでかけていき、表現とコミュニケーションのワークショップを6回開催しました。

釜ヶ崎地区ではホームレスやアルコール・薬物・ギャンブル等の依存症、貧困問題などがあり、釜ヶ崎に関係のない人が足を踏み入れることはめったにありません。地域の公園は閉鎖されていたり、野宿者や労働者が多いために、こどもたちの居場所・遊び場所はとても少ないのが現状です。「こどもの里」がこどもたちの拠り所とはなっていますが、広くはなく、こどもたちがのびのび活動できる状態にはありません。そこへ、アーティストとボランティアの大人や若者が出向き、遊びの手法を用いて、からだやこころを刺激し表現力を高めるワークショップを実施しました。

自分の気持ちを他者に伝えたり、他者をおもう想像力をはぐくみ、創造力を高めることをこころがけました。これまでに通算2年にわたり私たちは、「こどもの里」でアーティストによるワークショッププログラムを実施してきました。最初こどもたちは、自ら表現することを躊躇していましたが、回を重ねていくなかで想像力・創造力を発揮するようになっていきました。

アーティストとこどもたち、「こどもの里」の職員との信頼関係もでき、「こどもの里」の運動会やクリスマスパーティに、スタッフやボランティアも参加するようになりました。事務局と「こどもの里」とで会議をもって、季節行事やこどもたちの状態にあわせてワークショップの内容を確定していきました。ワークショップ終了後には、参加したこどもたちとふりかえりの会をもち、またその後、アーティストとボランティア、事務局とによって検証と次回の課題を設定しました。

ワークショップの内容



1回目 2008年5月30日(金) 16:30-18:10

「音に出そう 体で遊ぼう 言葉にしよう」

参加人数：児童14人、スタッフ7人

- ・自己紹介
- ・音で遊ぶ (いろいろな楽器の音をパトタッチ)
- ・体で遊ぶ (いろいろな体の動きにチャレンジ)
- ・言葉で遊ぶ (自分の好きな言葉表現し、みんなで分かち合う)



2回目 2008年6月12日(木) 16:00-18:00

「遊びで体中を動かそう」

参加人数：児童15人、スタッフ10人

- ・自己紹介
- ・輪になる (輪になって手足を使った遊びで体をほぐす)
- ・いろいろな相手と遊ぶ (最初は2人組から段々と人数を増やして遊ぶ)
- ・思い出を話そう (グループになって思い出を演じることにチャレンジ)

わたしのこと 覚えてる？
ワークショップ参加のアーティストの声

3回目 2008年7月10日(木) 16:00-18:00

「いろんな動きで演じてみよう」

参加人数：児童10人、スタッフ10人

- ・いろんな歩き方 (斬新な歩き方を想像し、駆け巡る)
- ・二人で歩く (二人組になって一人は目を閉じてもう一人の合図を頼りに歩く)
- ・にんげんねんど遊び (人間が粘土になって体を使った表現を楽しむ)
- ・グループで演劇 (“夜中の2時”という題でグループ演劇)

おぼえとる。ユリやろ。
ワークショップ参加の子どもの声

アーティスト：表現教育家、音楽家、詩人など

ボランティア：教育関係者、紙芝居劇メンバー、学生、写真家、日雇い労働者、野宿者を支援する人、コミュニティアートの実践者など

スタッフ及び事務局：当団体のメンバー

ココルームきたで！ココルーム！
きょうは、なにすんの？
ワークショップ参加の子どもの声



4回目 2008年8月28日(木) 16:00-18:00

「思い出を地図にしよう」

参加人数：児童13人、スタッフ8人

- ・思い出を話そう (“夏の思い出”についておしゃべり)
- ・思い出を絵にしよう (3m四方の白い紙に夏の思い出を描く)
- ・絵から物語をつむぐ (紙に描いた思い出を物語へ表現し直す)
- ・みんなで発表 (絵・ことば・身振りなどを使って表現)

5回目 2008年9月11日(木) 16:00-18:00

「ごっこ遊びをしよう」

参加人数：児童11人、スタッフ7人

- ・掛け声をまわそう (輪になって隣りに掛け声をまわす)
- ・うそ？ほんと？クイズ (一人ひとりが自分に関するクイズを出題し、みんなで一斉に答える)
- ・好きなもの探し (身近にあって手の平にのるほどの大きさの好きなものを探し出し、みんなに紹介する)
- ・ごっこ遊び (“家族”をテーマに探してきたものを何かに見立てて、ごっこ遊び)



6回目 2008年10月9日(木) 16:00-18:00

「想像の世界を歩こう」

参加人数：児童12人、スタッフ9人

- ・もしもの世界を見立てる (スケートリンクや砂漠等今とは違う世界を想像し、歩き回る)
- ・もしもの瞬間になりきる (陸上大会でリレーアンカーになったつもりでゴールを目指す)
- ・あいさつで世界を歩く (いつもと違う自分を演じてあいさつ)
- ・立体記念写真 (“家”をキーワードにグループで物語をつくり、物語のワンシーンをみんなでハイチーズ)

ワークショップに参加したこどもたちの変化

皆の前で話すことや表現することに躊躇がなくなっていった

手をつなぐと握り返す力が強くなってきた



高齢者の聴き取りによるまちの再発見プロジェクト

地理学者とアーティスト（詩人、ラッパー、美術家、表現教育家）計5人が、釜ヶ崎地区に暮らす高齢者や生活保護受給者を中心にライフヒストリーを聴き取り、作品化し印刷物として発表しました。釜ヶ崎で30年間活動している「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」の事務局長にコーディネートしてもらい、釜ヶ崎で活動するNPOや簡易宿泊所の役員などを通じて話を聴き取る人を探しました。聴き取った内容は、釜ヶ崎に至る歴史、釜ヶ崎に暮らす理由、どのような思いで釜ヶ崎で暮らしているのかなどについてです。

私たちはこれまで、浪速区西成区など的高齢者、大阪府庁の公務員、上町台地の住人などを対象に聴き取りの作品化・発表をてがけています。聴き取りと作品化を「こころのたねとして」というメソッドとして確立しており、今回もその手法を用いました。

作品

「卒業証書」

聴き取られた人：NPO 釜ヶ崎支援機構代表理事
聴き取った人：大阪市立大学教員（専門：地理学）

「島田東町 59 番地」

聴き取られた人：紙芝居劇「むすび」メンバー、生活保護受給者
聴き取った人：詩人

「今、思えば…」

聴き取られた人：釜ヶ崎のまち再生フォーラムメンバー、生活保護受給者
聴き取った人：ラッパー

「よくある話、もしくはどこでもないここについて。」

聴き取られた人：釜ヶ崎協会メンバー
聴き取った人：美術家

「わたしはめぐまれている」

聴き取られた人：西成区居住者（70 歳代の女性）
聴き取った人：表現教育家

話を聴き取られた高齢者の反応

印刷物を渡したところ、それを見せながら「わし 載ってんねん」と周りの人に話している人や、自分のページをコピーして持ち歩いている人などがある。

◎私たちが伝えたかったこと

釜ヶ崎のこどもたちと表現のプロジェクト

こどもたちをめぐる状況はとて厳しく、家に帰れず「こどもの里」で寝起きするこどもや、外国人の親を持ち日本語に慣れたところに海外に戻るこどもなど、さまざまな事情があり、同じこどもでも日によって状態が異なりました。前回はワークショップに積極的だったこどもが今回はふさがちだったり、という具合です。こどもの背景をいちいち聞くかどうかで講師との議論もありましたが、具体的にこどもに尋ねるといことは避け、ワークショップのなかで物語作りを行う中で、家族のようすを窺い知ることとしました。そして、こどもたちが自身の状況を意識化するとどめしました。私たちは、こどもたちの生活状況に寄り添うようなかたちをとりながら、認知する力と表現する力をもつことによって、現状を乗り越えていくことを伝えようとしてきました。

高齢者の聴き取りによるまちの再発見プロジェクト

高齢者に人生を聴き取ることによって、聴き取られた人は、釜ヶ崎という特殊な地域が周縁地域とつながっていることを意識化し、釜ヶ崎というまちを再発見します。また聴き取った内容を作品化し印刷物として発表することによって、まちの人々がまちの記憶に耳を澄まし、まちへの思いを深めることを狙いとしてしました。まちを再発見するとは、そのまちに生きる人の話を聴き取り、作品化するという手法そのものに宿っていると考えます。

◎エピソード

地域の人たちや地域の諸団体の人がカフェに立ち寄ってくれることから、聴き取り者との関係も育まれていて、聴き取り予定者が病気などでキャンセルされても他の聞き取り者がすぐにみつきり、地域とのつながりが事業の成功につながったといえるでしょう。事業そのものの変更点はなく、計画通りに実施しました。報告書作成に関しては大阪市立大学と協働で作成することにし、報告書はISBNコードをつけ図書館におかれるなど、広がりをもたせることができました。

右：明日の地図の製作中の様子
下：完成した「明日の地図」



あしたの地図よ子ども表現プロジェクト
子どもたちが、釜ヶ崎の歴史や過去と現在との対比を学んだ後、巨大な地域の将来の地図を描きながら場所の物語をつくり、その物語を発表しあった。



◎私たち自身で活動を評価

私たちが釜ヶ崎で「インフォショップ・カフェ ココルーム」を運営していることから相乗効果がありました。スタッフがお客さんを連れて「こどもの里」の運動会のボランティアに参加するなどして、関係を構築してきました。地域の人への聴き取りも日常的な関係があることでスムーズに行うことができました。

また大阪市立大学の研究者の参画によって、さらにさまざまな角度から本事業を深めることができました。大学と協働して2009年3月7日にシンポジウム「場所の力」を開催しました。聴き取りした作品を朗読発表し、聴き取るという手法をもちいた「ことばの力」に高い評価を得ました。同時に、「こどもの里」でのワークショップの様子のパネル展示とこどもたちが制作した「あしたの地図よ」の作品を展示し、周知できたことも成果としてあげられます。

報告冊子は大阪市立大学と協働で作成することにより、多くの人に知らせることにつながりました。

◎私たちの“これから”

高齢化していく釜ヶ崎において聴き取りと作品化する作業を通じて人々をエンパワメントし、作品に触れた人が釜ヶ崎に思いを馳せる機会となったことから、今後も聴き取りの作業を積み重ねていきたいと考えます。

「こどもの里」でのワークショップは、助成金などを獲得しないと講師に来てもらえませんが、ワークショップの重要性は大きいと考えます。幸いなことに、スタッフ自身にこれまでの経験が蓄積されています。スタッフそれぞれの専門性を考慮のうえ、ファシリテーターを担うなどして、ワークショップの継続を計画しています。

新たな拠点
他の助成財団の支援を受けて、「インフォショップ・カフェ ココルーム」の向かいの空き店舗（元文房具屋）に商店街、大学、外国人旅行者、高齢者等多様な主体が交流する施設「カマン！メディアセンター」をオープンした。施設では、イベント情報、地域の歴史を紹介する写真、外国旅行者向けのパンフレット等を用意している。積極的に情報発信を行うことで、釜ヶ崎のコミュニティカの向上をめざしている。